新岡垣風土記 第439回

岡垣の炭鉱③
―昭和期の炭鉱―

岡垣歴史文化研究会　石田　健次

昭和初期における岡垣の主要炭鉱は、海老津炭鉱であった。1937(昭和12)年に始まった日中戦争により石炭の需要が急増し、石炭の供給不足を補うため増産が求められた。このような状況から、岡垣においても、後に海老津炭鉱とともに岡垣の主要炭鉱となる高陽炭鉱が開鉱し、その他、小規模な炭鉱も次々と開鉱した。

▲高陽炭鉱ボタ山

1945(昭和20)年に第二次世界大戦が終結した時には、石炭の生産量が大きく低下した。戦後復興には石炭の増産が重要な政策とされ、国の完全な統制の下で石炭の増産が図られ、戦後の経済復興を牽引した。

戦後、岡垣では、宝炭鉱、遠賀炭鉱、新海老津炭鉱の3炭鉱が新たに開鉱した。

その後、石炭から石油へのエネルギーの転換が進み、1961(昭和36)年に、新海老津炭鉱と宝炭鉱が閉山し、岡垣から炭鉱が全てその姿を消した。

【岡垣の二大炭鉱】

●海老津炭鉱(戸切字百合野)

明治末期から鉱業権者の変更を続けてきた炭鉱で、岡垣の炭鉱の中では一番長く操業を続けた。最盛期は1928(昭和3)年で、従業員1328人で14万1700トンの出炭量を記録している。その後は、不況により出炭量は半分にまで減少した。

1937(昭和12)年に日中戦争が勃発し、石炭の増産が求められたためか、同年に国の重要炭鉱に指定されている。

1941(昭和16)年の太平洋戦争開戦により、出炭量は増加し、終戦前年の従業員は1086人で、月平均一人当りの出炭高は約5トンであった。

第二次世界大戦の終戦後は、経済復興のため石炭の増産を求められたが、戦前ほどの出炭量は記録していない。

1955(昭和30)年に伝染病の集団赤痢が発生し、多くの患者を出した。

閉山時の鉱員は358人で、1956(昭和31)年12月に閉山した。

●高陽炭鉱(山田字恋ノ田)

最初の操業は、1914(大正3)年からの3年間のみとなっていたが、1938(昭和13)年に福岡鉱業株式会社が買い取り、翌年に操業を開始した。

この操業開始は、日中戦争の開戦により石炭の増産が求められた時期と重なる。太平洋戦争開戦の翌年には、高陽炭鉱としては最大の約15万6000トンの出炭量を記録している。1943(昭和18)年当時の月平均一人当りの出炭高は7・7トンであったが、終戦後の1948(昭和23)年には約半分の3・6トンに減少している。坑口は、高陽地区に1坑と2坑が、西山田地区に3坑があった。

1956(昭和31)年には、ガス爆発の事故が発生し、死者7人、重傷者5人が出ている。

1957(昭和32)年に、石炭鉱業合理化事業団と売買契約が成立し、20年の歴史に幕を閉じた。

【昭和期に操業したその他の炭鉱】

炭鉱名	所在地
竜王炭鉱	戸切字白谷
宝炭鉱	戸切字河内
岸元炭鉱	戸切字岸元
昭和炭鉱	戸切字白谷
新海老津炭鉱	戸切
山田炭鉱	山田字地蔵面
遠賀炭鉱	山田字古鍋田
野間炭鉱	野間字大日焼
宝炭鉱(※)	海老津字小豆

※　宝炭鉱(戸切字河内)と同系